第24回 日本消化管CT技術学会 総会・学術集会 参加報告

小樽掖済会病院 大家　佑介

皆さま、こんにちは。小樽掖済会病院の大家佑介（おおや ゆうすけ）と申します。
昨年に続き、今年も日本消化管CT技術学会 総会・学術集会に参加いたしましたので、ご報告させて頂きます。2026年6月20日(土) に順天堂大学 本郷・お茶の水キャンパス７号館 13階有山登メモリアルホールにて、国立がん研究センターがん予防・検診研究センター 外来研究員の山本修司 大会長、順天堂大学医学部附属順天堂医院の工藤晃 実行委員長のもと開催されました。今回のテーマ「消化管CTが語るサインと知能技術としての解読～ 画像・データ・臨床判断が交差する地点 ～」のもと、会場では様々な発表、講演が行われました。

私は、一般演題にて「非剛体位置合わせを用いた大腸がん術前支援画像作成の検討」を発表いたしました。CANON社製のCTに搭載されている「DE Registration」というアプリケーションを活用し、非剛体位置合わせ処理を行った動脈相の画像を術前支援画像に取り入れることで従来に比べ、位置ずれの少ない術前支援画像の作成が可能になるといった内容になります。「DE Registration」はコンソール上で簡便に非剛体位置合わせを行うことができ、本来デュアルエナジーCTを用いる際に使用するものになりますが、さまざまな場面への応用が期待できると考えています。各施設でも一度活用してみてはいかがでしょうか。

その他、一般演題では健診領域、ワークステーションによる検討、自作の大腸展開画像の開発など多岐にわたる内容であり全国の各施設がどのように大腸CTに取り組んでいるのかを知ることができ、当院での今後の大腸CT検査に役立つ内容ばかりでした。特に「健診施設の大腸CTによる受診行動への影響―便潜血陽性放置2例」では、改めて大腸がん検診の重要さと大腸CTが救える大腸がんの可能性を実感いたしました。

ランチョンセミナーでは、笠岡第一病院の笹井 信也 先生による「ただの憩室ですか？―憩室をめぐる病態―」という講演を拝聴いたしました。大腸憩室は日常診療でしばしば遭遇する所見であり、何気なく憩室という言葉を使っていましたが、この講演により憩室疾患それぞれには機能的・構造的違いが存在し異なる機序を背景に分類されることなど、なかなか勉強できる機会のない憩室の基礎的な知識を得ることができました。また、腸間膜から遠い自由ひも側では血管貫通部が少ないため憩室がほぼできないというお話にはとても驚き一番印象に残った内容です。

技術講演は、群馬県立県民健康科学大学 診療放射線学研究科の小倉敏裕先生による「大腸検査におけるCT とトモシンセシスの比較」という講演でした。拝聴する前から果たしてどのように大腸検査にトモシンセシスを応用するのか、もしかしてCTよりも有用なのかなど、とても楽しみにしていた講演でした。トモシンセシスの解像特性や撮影条件を変化させたときの直腸模擬ポリープ描出能、直腸模擬ポリープが同等に見える撮影条件で撮影した時の各断層位置における吸収線量分布などに関する報告があり、とても詳細な検討ばかりでしたが、トモシンセシスの被ばくの多さやCT画像ではワークステーションによる解析が行えることなどから、CTの優位性を改めて認識しました。小倉先生は毎回、独自の視点から非常に興味深いご発表をされており、その熱意にはいつも圧倒されます。

最後のプログラムは、「大腸CTのこれまでとこれから ～次世代へつなぐために～」をテーマに、

4名の学会役員によるパネルディスカッションでした。大きく分けて1.大腸CTの歩みと現在地　2.大腸CTの普及と臨床的・社会的役割 3.技術継承と人材育成の課題 4.AIの活用と10年後の展望といった流れで進行されました。

前半は、諸先輩方が大腸CTの技術を完成させ、3D再構成ソフトウェアの実用化、炭酸ガス自動送気装置の承認、大腸CT加算の保険収載を経て、臨床的地位を確立させるまでのご活躍を改めて学ぶ良い機会となりました。そのようなお話の中で、現在直面している認定技師の不足や地域格差といった構造的課題について議論があり、現代の内視鏡全盛の時代において、大腸CTの「低侵襲性」「全体俯瞰性」といった独自の価値をどのように確立していくかが問われるとのことでした。これは、まさに今後私たちが担わなくてはならない役割であると強く感じました。

後半は、技術継承と人材育成、AIの活用などを中心に10年後の展望について議論がありました。大腸CTは初学者にとってハードルが高いとの意見があり、今までに培ってきた技術やノウハウをもとにマニュアル化を行うことの重要性が議論されました。今後、学会として取り組まれることを期待しています。また、最近は国家試験での大腸CTの出題頻度が高いため、学生の認知度は向上していると前向きな報告もありました。

AI技術に関しては、CAD機能など実用化レベルに近づいてきており、見逃し防止となり検査の信頼性を高めるための強力なツールとして期待されるとのことでした。また、レポート作成や撮影条件など業務負担を軽減するアシスタントとしてのAIの役割などにも注目したいとフロアからの声がありました。AI技術の発展は、大腸CTの普及を後押しする重要な要素であると感じました。



学会全体を通して、諸先輩方の培ってきた技術や熱意を感じることのできた非常に有意義な学会でした。今後も技術力の向上はもちろんのこと、大腸CTを多くの放射線技師・医師・地域にどのように広めていけるかを考え、大腸CTに携わっていければと思います。

次回は、札幌開催です！！大会長は、斗南病院の高林健さんが務め、私も微力ながら実行委員長として大会長、学会を支えさせていただきます。初学者からベテランまで幅広い方々にご参加いただき、有意義な学会となるよう準備を進めております。消化管 CT に関する知識を身につけたい方や知識を深めたい方はもちろん、少しでも興味のある方にもぜひご参加いただきたいと思います。施設や地域の枠を超えて懇親会も毎回大盛り上がりです。ご参加される医師の先生方もとても優しく、ざっくばらんに情報交換ができますので、Web ではなくぜひ現地でお会いしましょう！